



新編 五山抄
下





申納をいふのふのもろくふれふふはら
ふふ、をのこともなるやふつふふふ
のすくひきりふはきやよひめふふふを
うけたりたりて

石上^{イソノカミ}諸貴^{モロキ}れ 姓氏録曰神饒速日^{カニニギハヤヒ}
命^{ミコト}之後也。物部連公麻侶賜物部朝
臣^{ウヂノミ}姓^{ナリ}改賜石上朝臣^{イソノカミノミ}姓^{ナリ}鷲^{トビ}順和^{ノボロ}
名云豆波久良米

何のやうしうあんとあふふふふの
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
何社ふふふふふふふふふふふ史

竹東抄



記三代世表第一云詩傳曰湯之先
 為契無父而生契母與姊妹浴於玄
 丘水有燕銜卵墮之契母得故含之
 誤吞之即生契索隱曰按史引詩出
本紀云玄鳥翔水遺契生而賢堯立
卵城簡狄取而吞之為司徒姓之曰子氏子者茲茲益大
 也詩人美而頌之曰殷社詩云也
 天命玄鳥降而生高商者質殷號也
 予按此說牽涉三才圖
 會云石燕出零陵郡形似蚺而小或
 云生山洞中因雷雨則飛出墮於沙
 上而化為石今人以催生令婦產兩

竹取抄下

手各握一枚須臾子即下採無時本
 草綱目曰玄鳥至時祈高禱可以求
 嗣西京雜記元后在家嘗有白燕
 含白石大如指墜后積篋中后取之
 石自剖為二其中有文曰母天地后
 乃合之遂復還合乃寶錄焉後為皇
 后云

竹取抄
 手各握一枚須臾子即下採無時本
 草綱目曰玄鳥至時祈高禱可以求
 嗣西京雜記元后在家嘗有白燕
 含白石大如指墜后積篋中后取之
 石自剖為二其中有文曰母天地后
 乃合之遂復還合乃寶錄焉後為皇
 后云

竹取抄

舒明紀散卒とあり、
おつてにあらざるばあ
れ中 敬也

あなし 城はあつて
万八秋田刈傍庵も未懐
者よみふしとの抄は
懐者いふまゝに
次のはふりかへし
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる

おつてにあらざるばあ
れ中 アレヒロ 敬也 アレヒテ

あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる

あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる
あつたはる。あつたは
はるの
人をもつた
ら 興もはる

天智紀傳其_二並_一獲賜爵祿
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)
 女_一 (付給_二 福給_一)

夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一
 夜去_二 夜去_一 夜去_二 夜去_一

古事記之取_二 伊豆志河
 之河島一節竹作八目之
 荒籠_一
 古事記之取_二 伊豆志河
 之河島一節竹作八目之
 荒籠_一
 古事記之取_二 伊豆志河
 之河島一節竹作八目之
 荒籠_一

御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服
 御服

おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ことごとく

おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ことごとく
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ことごとく
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん

なまきちて 尾をさげきり
 荒籠 ^{アヲ}めのあつらあつた

きんねをりおほえん
 おんさつおほえん
 ことごとく
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ことごとく
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ことごとく

研削下

おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん

文徳実録
 齊衡二年十二月五子朝
 大炊寮大八島電神
 色乗和發云金以八
 といふ大常と云
 伊勢其のひさまたち
 おんさつおほえん

おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん

龍 龍
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん
 おんさつおほえん
 ほうし命にてあつせん

竹取抄

白目
口は音黒眼上竄
息出
...

これハ 括てあんな
テアの支タ

此見白
...

...

生出

疎離

...

抄

...

...

...

十取抄

...

不圖 紙燭 擡頭 故屎 送糞

...

禁中にて死にのふかたは
 九條のむかひに出入り出
 たりし日本紀畧云延喜
 八年六月廿六日乙未俄
 而雷声大鳴陸清涼殿坤
 第一柱上○大納言兼民
 部卿藤原清貫衣冠胸裂
 大亡○民部卿朝臣載平
 葬至陽明門載車云々

終ひ多れば、あまのこゝろを
 わく、なかり終ひよるる
 違例 三十一名 あまのこゝろ 順和名云韓獮
 ひびのあ、なびたのまて、ふはへくも
 あまのこゝろ
 あまのこゝろを、なかりのこゝろを、あまのこゝろ
 人のこゝろ、わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 おまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ

終ひ 二

終ひ多れば、あまのこゝろを
 わく、なかり終ひよるる
 違例 三十一名 あまのこゝろ 順和名云韓獮
 ひびのあ、なびたのまて、ふはへくも
 あまのこゝろ
 あまのこゝろを、なかりのこゝろを、あまのこゝろ
 人のこゝろ、わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 おまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ

終ひ多れば、あまのこゝろを
 わく、なかり終ひよるる
 違例 三十一名 あまのこゝろ 順和名云韓獮
 ひびのあ、なびたのまて、ふはへくも
 あまのこゝろ
 あまのこゝろを、なかりのこゝろを、あまのこゝろ
 人のこゝろ、わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 おまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 わく、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ
 あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ、あまのこゝろ

竹取抄

うきうきおれやふあれと
 ましらのちうもえやま
 ちよおのちのちよおのち
 ぱんちもきくつんごとい
 つゆそしをかう、又父子
 不貴善の善也

あつちらめれ着るやう。成門のめりて
 のころちん事おしうもおむらうと
 しひくはうよる起づくもあらしうめ
 ち子のきうのあれどいやらうづーし
 ちのちのちのちのちのちのちのち
 うらみあういもちせあう
 ちらうまさん ちよれ使ぢちらう
 よつぞおし ちかー 畏カシレ
 恐カシレ有カシレ万葉 君の仰もおそらういづ
 とたあり ちらうちらうちらう ち
 ちよ生かちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちち

あつちらめれ着るやう。成門のめりて
 のころちん事おしうもおむらうと
 しひくはうよる起づくもあらしうめ
 ち子のきうのあれどいやらうづーし
 ちのちのちのちのちのちのちのち
 うらみあういもちせあう
 ちらうまさん ちよれ使ぢちらう
 よつぞおし ちかー 畏カシレ
 恐カシレ有カシレ万葉 君の仰もおそらういづ
 とたあり ちらうちらうちらう ち
 ちよ生かちちちちちちちちちちち
 ちちちちちちちちちちちちちちち

ハシメテ...

まじりだつらんすくめてまじりたつてさ
せぬらんかみまじりまじりまじりか
まじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり

最撰

竹取抄

無計日本紀
ハ朽借の巻

まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり

三行五依國掘金詠
急いせよ

まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり

竹取抄

百官ハ職在抄云孝徳天皇
 大化元年始置八省百官
 之百官非官有百之謂
 謂官數之多也此言
 百官ハ職在抄云孝徳天皇
 大化元年始置八省百官
 之百官非官有百之謂
 謂官數之多也此言

此の御書は、
 大化元年、
 孝徳天皇、
 始置八省、
 百官、
 此の御書は、
 大化元年、
 孝徳天皇、
 始置八省、
 百官、

大化元年

孝徳天皇
 大化元年
 始置八省
 百官

孝徳天皇
 大化元年
 始置八省
 百官

竹取抄

孝徳天皇
 大化元年
 始置八省
 百官

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style.

竹取下二子

日本紀 可美 可憐
Handwritten text at the top of the left page.

Main body of handwritten text on the left page, written in a cursive style.

竹取抄

子裁家 良の悦とひて
 こわて月をばらめり
 月夜とて何事ぞよ八景
 ありとせ

月夜とて何事ぞよ

原氏寄く本ふ力なきは
 へりらそつたれんは
 莫對月明思往事損君顏
 色減君年

思ひたひしむとてしつし我を
 さらしむ人さうりなむわ
 なる事思はばあづおほもらん本
 命をさやういごと思よももろし物
 なるんもろ九おほおほりつひお
 月なるん思はばあづおほもらん本
 命をさやういごと思よももろし物
 なるんもろ九おほおほりつひお
 月なるん思はばあづおほもらん本
 命をさやういごと思よももろし物

唯囁かた
 囁玉篇之涉切私罵る
 相書と私言といふ靈
 異記に唯をもよもつ万葉
 耳言とてめくもよそ
 つと回義

月のほほほほほほほほほほほほ
 づららららららららららららら
 らららららららららららららら
 とさそそそそそそそそそそそそ
 とろろろろろろろろろろろろ
 ほろろろろろろろろろろろろ
 ういなるわ 唯
 八月十五はむくの月のかよはなかく
 やあをいといふ九あまろゆわ人目を
 くはつみほろろろろろろろろろろ
 て親も、何事ぞあはしとひさわを

狹くよりのまうふさか
 へれハバカ有れおの人
 もいそてうハバカうら
 らむき

かろやねなうしうふまてしやうさ
 んとねむひしうまあまうあうん
 まさうし路らんものぞやおひく
 今まてまごうけうはくわあまて
 やいとてうらうけうぬぞ於のう
 ハけ國の人もあまをのうや
 ねんちや

月れみやこ 起世經云佛告比丘
 月天子宮殿縱橫正等四十九由旬
 四面垣牆七寶所成月天宮殿純以
 天銀天青瑠璃而相間錯二今天銀
 清淨無垢光甚明曜餘之一分天青

抄下

仁取抄

瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照
 亦為五風攝持而行亦云於此月殿
 亦有大輦青瑠璃成輦高十六由旬
 廣八由旬月天子身與諸天女住此
 輦中以天種五欲功德和合受樂
 隨意而行月天子身壽五百歲子孫
 相承皆於彼治云又龍城錄曰開
 元六年上與申天師道士鴻都客八
 月望日夜曰天師作術三人同在雲
 上遊月中過一大門在玉光中飛浮
 宮殿往來無定寒氣逼人露濡衣袖
 皆濕頃見一大官府榜曰廣寒清虛

之府其守門兵衛甚嚴白刃粲然望
之如凝雪時三人皆止其下不得入
天師引上皇起躍身如在烟霧中下
視玉城崔峩但聞清香鵲鸞下若萬
里瑠璃之田其間見有仙人道士乘
雲駕鶴往來若遊戲少焉步向前覺
翠色冷光相射目眩極寒不可進下
見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往
來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂
音嘈雜其甚清麗上皇素解音律熟
覽而意已傳頃天師亟欲歸三人下
若旋風忽悟若醉夢中迴尔次夜上

皇欲再求往天師但笑謝而不允上
皇因想素娥風中飛舞袖被編律成
音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗
無復加於是矣
あまをなんむしらのらさうあま
よよかなんはそ界よりそまうてさ
あま
あまそその因縁ありてあましく
あま
いすはつふくさひなりのよろねは月の
十五日にあのもとの國よわあまのく
あまごらんどもあまのあまのあまのあ

なぐねのー 和名鈔云蔓
美蘇敬本草注云蔓草和
右

ぼしなぐねのー人ぐちかろしん事とんぬ
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を

(和名下世田)

阿子名古事記用菘菜
菘菜之子或松子俱謂菘
種

菘の菘とひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を
まろちかあましくたかぐあはしんかろんか
ひくひくしな丸を

竹取抄

なごんちやう
附本

赤王五願經 月支支 無思想天の事
八十四千萬劫とてこころをさへしよめりて
片時とていつたなり

徳國の父母の事とてあやうき事にて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて

乃國父母の事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて

附本

立標 氣推
意氣 極
何んことつたあのみをえ
なりとて
あやうき事とてあやうき事とて
實 慈愛 本紀

白之斑 奴之奴 腰屈目職
万九 詠浦馬子 破は若有
之皮 毛皺 奴黒有之髪毛
白斑 奴云 腰屈目職

竹取抄

いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて

いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて

いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて
いかにあやうき事とてあやうき事とて

一の文よあらわぬを
ひきき事 二十餘年
なうぬこまてまへは
あそ許とてくわ
あそく一年をまは
ふまほし

且同七きいれまうるに
十ばりなわらぬとおも
し可きなる老よなり
上の文よあらわぬを
きうとてあはしとけ
お事よあらわぬを
し
し使あらわぬを
し可きなる老よなり
上の文よあらわぬを
きうとてあはしとけ
お事よあらわぬを
し

抄下廿

ちやくしかぬ 少将五
位殿上人中為譜第公達
者任之職掌同中将
高神 姓氏録云大

竹取抄

此十五の如く人の
れんあつてまて
おのりく
一人とあつて
の使
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し
し

のりていふは...
 めは射殺さん...
 飛也アリを...
 今迄も...
 外詳...
 障其...

是を...
 仕計...
 人...
 彼國の...

ちの國...
 せはあ...
 竹取抄

ちの...
 人...
 今昔...
 欽明...
 伊企...
 人...

さきびし事あり。唐書より郭弘霸
とらふもの。夷をうらむにあらはして則
天皇はよつてはひひ、かゝりしつ成
ハ。彼をうけしをうけしその筋をぬき
其志、あつたらしむ其血をさくつ
を龍をた、人とて、又おれ似つ
かろねれいごと、いさむれなの、いま
そを屋の上よをる人なれば、いよ、いよ
ははなす

大語コトカ塵塵仙仙大言大言出雲出雲風風を種種抽抽ほく
らびくさのあ、よ、生生もつて、いよ、いよ、こと
まらうに、な、よ、いよ、あ、と、ま、こ、無無心心

古事記の末より、いよ、いよ、の故
る、いよ、いよ、の、いよ、いよ、
ま、いよ、いよ、いよ、いよ、
いよ、いよ、いよ、いよ、

いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
ま、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
う、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
う、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
ま、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
あ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
ま、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
お、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
ま、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
父、母、を、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、
いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、いよ、

しんげんしよあざは
けけんハニんぶん
不考

はごらんしおかしらふらむらうのり
すけさうしんしんはしんはきんせ
ぬさあわらむんがうおもひなまこ
けらあをのこらあらしりあうた
ん事のいふし九しんあうけり
ごらんもどなくきりあうようか
すけさうしんしんしん事いよこ
しんしんしんしんしん父母ふ今一
あめいんばあらふくしんあう
ごらんしんあうとあうけりあう
らあしんしんあうしん九しんあ
けけん

竹取抄

老翁しんしんあうしんあう
不老しんしんあうしんあう
ひんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう
はんあうしんあうしんあう

竹取抄

酉陽雜俎天上^二有憶念樹物隨意而
生^三一多門天又生^二くハ青樹
ありて身を^三くらんじ衣樹ありて衣
を^三あうしんあうしんあう
あうしんあう
天是^二四種樂^一之^二一^一也
老翁しんしんあうしんあう
むらあうしんあうしんあう
いんあうしんあうしんあう
あうしんあうしんあう
あうしんあう
天人の使あうしんあうしんあう

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

くたろのうたをうたうよまありゆきなり
古依は化よあつたハまでさかひさかき
とまひ 白癡 本朝文粹

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

装束 飛車 順和名曰兼名宛注

云奇眩國人能作飛車後風飛行故

曰飛車 按ふか文山海經よりし

きり 羅蓋

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

本朝文粹

眼をくわいせつに
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

竹取抄

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

あつた人かゝり 昔は
あつた人かゝり 昔は

万十の傳に寵傳之後還觀
寄物多主

人同よももは、縁あつていふを
てんまきもてをきし、あつていふを
事れはいなまきし
形見カクミ万葉集
記念カクミ遊仙

天人の中よももは、縁あつていふを
これね衣いし

酉陽雜俎 天人衣無經緯 又比紅
兒詩よ 天人の衣之重さ、六、七、
搜神記曰 豫章新喻縣男子見田中
有六七女皆衣毛衣不知是鳥人甫
畝往得一女其解毛衣取藏之即
往就諸鳥諸鳥各飛去一鳥獨不得

竹取下州

去男子取以為婦生三女其母後使
女問父知衣在積稻下得之衣而飛
去後復以迎三女女亦飛去是亦も
お衣の類なももは、縁あつていふを
れね衣いし

不死の薬いし、ももは、縁あつていふを
月中の兔ををつくとらへていふを
異域志曰 長生國在穿胸國之本其
地有不死樹食之則壽有赤泉飲之
不老之云 張衡靈憲志云 羿得不死
之藥於西王母嫦娥竊之以奔月將

竹取抄

往_下枚_下筮_下之_下於_下有_下黃_下有_下黃_下占_下之_下曰_下吉_下翻
 翩_下歸_下妹_下獨_下將_下西_下行_下逢_下天_下之_下晦_下也_下母_下驚_下
 母_下恐_下後_下旦_下大_下曰_下婦_下娥_下遂_下託_下身_下於_下月_下是_下
 為_下蟾_下蜩_下

はたしあはれし下
 こゝろおきあ 織土のま
 天より下界を
 こゝろおきあ

はそ 日本紀より一
 ミノ

いふはたしあはれし下
 こゝろおきあ 織土のま
 天より下界を
 こゝろおきあ

竹下

人おきあはれし下
 こゝろおきあ 織土のま
 天より下界を
 こゝろおきあ

はたしあはれし下
 こゝろおきあ 織土のま
 天より下界を
 こゝろおきあ

ぬさしあはれし下
 こゝろおきあ 織土のま
 天より下界を
 こゝろおきあ

下

易曰泣血漣
如毛詩云鼠思泣血無
言不疾長恨歌云回首
血淚相和流 万葉十六
云昔有娘子字曰櫻兒也
于時有二壯子共批此娘
子○兩壯子不敢哀慟血
泣漣襟之云古々云
ちのたつくくおちくそたす
のあし川ハ夫ウヤウの
るくそふありをれ

あれちのみさー アハカノ
れ同顔面
けまきとよもしな
無用の人とのんぞ

中将 本のい中おれ
中将 華族四位任之執柄

埃囊抄云なまふけくく、目のあぬや
血の泪とらふし又たわぬ角又泪とら
わらふとふあて血の泪とらなふらふ
いづこなきを血の泪とらふとの
とねまのんまこ
あれちねらふし又たをふてさうせふ
どゆせんらふ命とをきしあんなら
るらうの何事ともうとなしと茶
ともをらふてたてたてあてたて
あせり
あのきたさし ちちねのちあさし
中ね人しくらささしとゆさわりく

息若一廿二世源氏中納
言之時兼之

大臣上達部 大臣宮中事
一向統領之故云一上
存徳天皇大化元年以阿
倍倉橋藤原山田石川磨
為左右大臣是始也
上達部ハ官ハ宰相位
三位以上をいふ

や姫をえつてあはれあふなりぬらふ
らくともさうは茶のほか又あささ
てふちもあはれけくは泣いていとあ
られづもねらふておとささしと茶
はあはれなるとなるとくささだん
上さすかをえしとづまのあささ
ちのさくともささせらふとくささし
まのつれ國もあはれなふらふらん

都良香富士記曰富士山者在駿河
國峯如削成直聳属天云々魚氏筆
乘曰日本國名倭國東北數千里有
山名富士又名蓬萊國中最高山三

氏部もちつくし

あつ月のちつきー

あつ月のちつきー

又片かー 勅書と茶
壺かろふ茶や一人のえ
人ははるまゝはまをま
とく

面皆海一柔直上頂有火烟秦時徐
福入海求藥終止此至今子孫稱秦

氏

氏部もちつくし

あつ月のちつきー

あつ月のちつきー

あつ月のちつきー

あつ月のちつきー

竹取下冊九

あつ月のちつきー

勅命ちつきく不死乃
茶を焼く一山なれど不
死の山といふといふ

一し其の茶下もれま
わすくてもぐし命の
く名付くもれもれま
もの中へちのかはま
はしのかちのか付く
もれまといふもれま
一し竹採茶の後も
不死く

竹取抄

あつ月のちつきー

月岩笠 例の他名は 都良香記
名富士取郡名云くすく不死不盡

此異名あり但はお月ハ例の寓言
よて兵士は富士とつあまをなせり

秘苑抄云富子の十名をあげて云
藤嶽 鳴澤高根 常磐山 塵山
二十山 三重山 新山 見出
山 三上山 神路山
都良香記云山頂中央窪下體如炊
甑甑底有神池亦其甑中常有氣蒸
出其色純青窺其甑底如湯沸騰其
在遠望者常見烟火云云
又級日記よりみまのこらふとてま
みえぬと云なりはらまのこらふとて
みまのこのとんまやうにぬるや
うなるよと云れさゆとてさしくなく
は

抄下四十

もつききりていりてさうめよとら
あつせんきりていりてさうめよとら
よいしきりていりてさうめよとら
もうとわいりていりてさうめよとら
ハ火のともえりていりてさうめよとら
清里録曰吳越孫總監丞佑富傾霸
朝用千金布得石緑一塊天質差峨
如山命匠治為博山香爐峯尖上作
一暗竅出烟則一聚而且直穗凌空
突羨觀視親朋傲之呼不二山云云
まうまうとていりてさうめよとら
賞とらとていりてさうめよとら

昌喜撰は此抄を原撰也
 其の序に云く此抄は
 竹取物語の傳記なり
 其の傳記は源氏物語
 にも見ゆるなり
 巨勢金岡相覽同人也
 其の傳記は源氏物語
 にも見ゆるなり
 高名録者相覽は其先代
 也云々花鳥餘情云々巨勢相
 覽ハ金岡子也金岡ハ寛
 平之時之人為其子則可為
 其之同時人云々再花抄云
 金岡子也除自成文抄云廣
 岐小目也八位下畫師巨勢
 朝臣相見昌泰二年二月除
 目執筆時平公云々順の傳
 記ハ相覽撰り云々
 其傳記ハ昌泰
 二年の既云々云々
 其傳記ハ相覽撰り云々
 其傳記ハ昌泰二年の既云々云々

竹取物語源起
 契沖河原系も其傳聞を考ふる
 其作者を論ぜども古人の傳記に
 源順の所作といふことあり
 人なりていふことあり
 順の略傳を首とす
 弘仁天皇
 左京大夫 攀コツル
 定カタ始賜姓源 至シ從四位下
 大納言 順ノリ從五位上
 能登守
 順の傳記は源氏物語の傳記に
 契沖河原系も其傳聞を考ふる
 其作者を論ぜども古人の傳記に
 源順の所作といふことあり
 人なりていふことあり
 順の略傳を首とす
 弘仁天皇
 左京大夫 攀コツル
 定カタ始賜姓源 至シ從四位下
 大納言 順ノリ從五位上
 能登守

竹取下四十一

順の傳記は源氏物語の傳記に
 契沖河原系も其傳聞を考ふる
 其作者を論ぜども古人の傳記に
 源順の所作といふことあり
 人なりていふことあり
 順の略傳を首とす
 弘仁天皇
 左京大夫 攀コツル
 定カタ始賜姓源 至シ從四位下
 大納言 順ノリ從五位上
 能登守

契沖河原系も其傳聞を考ふる
 其作者を論ぜども古人の傳記に
 源順の所作といふことあり
 人なりていふことあり
 順の略傳を首とす
 弘仁天皇
 左京大夫 攀コツル
 定カタ始賜姓源 至シ從四位下
 大納言 順ノリ從五位上
 能登守

佛取竹影の事

此の事も歌合後成り判云
凡そ竹影の事たるは
支那の事なりし然らば
よもやたしとていひ
とてやたしとていひ
香の歌合を往而見
顯昭然曰万葉集に
有る事たりとていひ
況し万葉集にありて
但堀河に在る所は
中の師討つていひ
こゝにありていひ
アのりていひ
そおとていひ
八幡川丸の本に
ありていひ
て別の影とていひ
甲したるにいひ
アとていひ
とていひ

合の時、れきしけり哉たつとよ
しつとて判考とていひ
たつとていひ
かろあれは
わろあれは
まろあれは
第一云佛云乃往古昔
云云時彼仙人得法
於其任處便捨身命
生酥消融入地即於没處
寶樓閣經 弘法大師將來
不空三藏譯
乃有三仙人
有生踊躍
猶如
三竹

竹影下三

此の事も歌合後成り判云
凡そ竹影の事たるは
支那の事なりし然らば
よもやたしとていひ
とてやたしとていひ
香の歌合を往而見
顯昭然曰万葉集に
有る事たりとていひ
況し万葉集にありて
但堀河に在る所は
中の師討つていひ
こゝにありていひ
アのりていひ
そおとていひ
八幡川丸の本に
ありていひ
て別の影とていひ
甲したるにいひ
アとていひ
とていひ

金為莖葉七寶為根於枝梢上皆有
真珠香氣芬馥常有光明所有見者
無不欣悅其竹生長十日則自剖裂
各於竹内生一童子顏貌端正令人
樂見最勝端嚴光色殊麗相好成就
時三童子則於是時竹下結跏趺坐
即入三定至第七日於其中夜皆成
正覺其身金色三十二相八十種好
圓光嚴飾時彼三竹皆變成七寶樓
閣云々云々云々云々云々云々云々
樓閣大陀羅尼乃不思議力とていひ
予心経なり経は男子なり哉め子

三蔵の生草も別傳論師
 三蔵の生草も別傳論師
 三蔵の生草も別傳論師
 三蔵の生草も別傳論師

古老傳曰此山麓垂馬里有老翁愛鷹
 孃飼犬後作箕為業竹節間得少女
 容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御
 宇延曆之北諸國下宣旨被擢美女
 坂上田邑麻呂為東國勅使富山裾
 老翁宅宿終夜不絕火光尚子細是
 養女光明也云田邑麻呂即上洛奏
 事之由於是少女登般若山入巖岨
 畢帝幸老翁宅翁奏由緒帝悲泣脫
 帝玉冠留此處登頂上臨金岨少女

又此物語を一名孫夜所
 抄傳ししつゝ孫氏女を
 又かゝるもとのゆゑに
 らぬ所抄傳ししつゝ孫氏女を

天智天皇欽一富士金
 岨へ入玉ノ此帝欽
 詞林採葉此説流も天
 智紀云十年九月天皇寢
 疾不豫或本〇十二月癸
 亥朔乙丑天皇崩于近江
 宮發首殯新宮云國史
 ぬ此是の定く皆落所
 築後説信用せられた
 由何はるれ多人もの巡歴記
 とつて古史の古き物
 二引用せられたるをい
 とつて

出向微笑曰願帝留此帝即入岨訖
 王冠成石在于今彼翁者愛鷹明神
 也孃者飼犬明神也 已上 今考之云
 當山縁起之上者仰雖可信用之時
 代甚不審也疑若天智天皇欽彼帝
 近江宮ニテ崩シ玉フトイハ氏実
 ハ不然白地ニ御馬ニ名テ出マシ
 テ隱玉ヲ所ヲシラス宇治山ノ麓
 ニ御鞋片落コレヲ取テ山陵ニ籠
 タテマツル鞋石トテ長三尺許有
 之富士金岨へ入玉フハ此帝欽可
 詳鴨長明巡歴記云取此山ノ傍ニ

昔本今昔物語卷廿八之今昔。天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要スル人ニアタヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ラシガタメニタカムラニ行竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光アリ其竹ノ節ノ中ニ三寸ばかりナル人有翁是ヲ見テ思ハク我年来竹取ツルニ今カク物ヲ見付シルヲヨロコヒテ片手ニハ其小人ヲ取今片手ニハ竹ヲ荷テ家ニ歸テ妻ノ姫ニ篁ノ中ニテ此女子ヲ見付タレト云ヒケレバ姫モ悦テ初ハ籠ニ入テ養ケルニ三ハカリヤシナヒケリ例ノ人ニナリ又其子ヤウマウ長大スルニニ世ニナラビナク端正ニシテ此

採竹翁ト云者アリ宅後ノ竹林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハララテラス百媚アリ見人斷腸聞者心ヲ動スコレヨリシテ青竹ノ中ニ黄金出来テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭先雲客重光艶言ヲツクリ戀懷ヲ抽ツ時ノ帝殿聞ニオヨヒテ御狩造ノ由ニテ姫ノ竹亭へ幸アツテ鶯ノ契ラムスビ松ノ齡ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申ケレバ帝空

竹取(四)

世ノ人トモ覺サリケレハ翁姫イヨクコレヲカナシ三愛レテ傳ケル間ニ此世ニ聞エタカク成ニケリ而ル間翁亦竹ヲ取ランガ為ニ篁ニ行又竹ヲ取ニ其度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付タリ翁此レヲ取テ家ニ歸又然レハ翁忽ニ豊ニ成又居所ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住ニ種々ノ財庫倉ニ充テ満テリ眷屬衆多成ヌ亦此兒ヲ儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思様ナリ然レハ弥ヨ愛シ傳ク丁無限シ而ル間其時ノ諸ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞リケレハ皆心ヲ盡シテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將來レ其時ニ會ハムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有

ク返玉フカタヘノ天是ヲシリテ飛車ライダレテ迎テ天ニ昇リ又鶯姫帝ノ御契ノサスカニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テゲリ其歌ニ云
今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイデヌル
帝御返歌
逢コトノ泪ニウカブ我身ニハレナ又藥モナニカハセン
勅使智計ヲメグラシテ富士ノ嶺ニノボリテ此藥ヲ焼アゲリト

ケリ其レヲ取テ持来レ然
ラム時ニ會ハムト云ケリ
後ニハ不打ヌニ鳴ル鼓ト
云物有、其レヲ取テ得サセ
タラン折ニ自ラ聞エムナ
ド云フテ不_レ會ガリケレバ
假借スル人ノ女ノ状形ノ
世ニ不_レ似_レ微妙ナリケルニ
航_レテ只此ク云ニ隨テ難_レ境
キ事ナレドモ旧ク物知タ
ル人等ニ可_レ求_レキ事ヲ問ヒ
聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ
行_レ或ハ世ヲ捨テ山中ニ
入_レリ此様ニシテ求ケル程
ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不_レ返
来ヌ輩モ有ケリ而ル間天
皇此女ノ有様ヲ聞シ食シ
テ此女世ニ並_レ無ク微妙シ
ト聞我レ行テ見テ安ニ端
正ニ姿ナラバ速ニ后トセ
ムト思シテ忽ニ大臣百官
ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸

アリケリ既ニ御_レシ着
ルニ家ノ有様微妙ナル事
王ノ宮ニ不_レ異ズ女ヲ召出
ルニ即參レリ天皇此レヲ
見給ニ安ニ世ニ可_レ譬者焉
ク微妙ナリケレバ此我カ
右ト成ラムトテ人ニハ不_レ
近付ザリケルナメリト喜
ク思シ食テヤガテ具レテ
宮ニ返テ后ニ立テムト宣
フニ女申サク我レ后トナ
ラムニ無限キ喜ヒ也トイ
ヘ氏実ニハ巳人ニハ非ヌ
身ニテ候也ト天皇宣ク女
子然ラハ何者ゾ鬼カ神カ
ト女ノ云ク巳鬼ニモ非ヌ
神ニモ非ヌ但レ巳ヲハ只
今空ヨリ人来テ可_レ迎キ也
天皇速ニ返ラセ給ヒ子ト
天皇此レヲ聞給テ此ハ何
ニ云フ事ニカ有ラム只今
空ヨリ人来テ可_レ迎ニ非ヌ

國名

仍テ此山ヲ不死山ト云ケルヲ郡
ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ上巳
詞林採
葉抄
國名風土記曰甲斐國トハ昔ハ富士
山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ種テ
アキナヒケル者アリ彼翁園生竹
林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖メ
置クソノ子程ヲヘテ是ヲ三レ
バ容顏優ナル寵姫トナリケリレ
カルニカレラ養子トスタケレ後
ニカノ翁ガ田作りケル時ニ暇ナ
カリレカバ養母ノ訟ヘテイハク

抄取下四五

隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助ト
ナリ玉ハザルトナサケナク云ケ
レバ鶯姫コレニ怒ヲナレテ富士
山ノ三子ニノホリテ岩ヲ蹴破テ
湯ヲ走ラカレ田ツクル人ノ所ニ
ナ焼石トナル件ノ祖父母ハニケ
テ白根ガ三子ヘユキ又彼田カケ
ル馬モニケテ信州駒ガ三子ニス
ニケル其駒主ヲワスレズ常ニナ
レシカバカノ馬ヲコノ口ニ入テ
飼レユエナリ此トコロヲ飼國ト
云レカルヲカナガキニ甲斐トカ

此レハ只我ガ云事ヲ辞ヒ
ムトテ云ナメリト思給ケ
ル程ニ暫ク有テ空ヨリ多
ノ人來テ眞ヲ持來テ此女
ヲ乘セテ空ニ昇ニケリ其
迎ニ來レル人ノ姿此世ノ
人ニ不似リケリ其時ニ天
皇實ニ此女ハ只人ニハ無
キ者ニ有ケレト思レテ
宮ニ返リ給ニケリ其後ハ
天皇彼ノ女ヲ見給ケルニ
實ニ世ニ不似形有様微妙
ナリケレハ常ニ思シ出テ
破無ク思レケレドモ更ニ
甲斐無クテ止ニケリ其女
遂ニ何者ト知ル事無し亦
翁ノ子ニ成ル事モ何ナル
事ニ力有ケム惣テ不心得
又事也トナム世ノ人思ケ
ル此ル希有ノ事ナレバ此
ク語り傳タルト也
今昔物語卷今流布此本

クナリ黒駒ト云モ甲斐國ヨリイ
ツルナリ

此物語ハ寶樓閣經よりりて
やうに契沖阿闍梨云々
あつてなす 柰女者
婆經世高譯佛在世時維那離國王
苑中自然生一柰樹枝葉繁茂實又
加大既有光色香美非凡王實愛此
柰自非宮中尊貴美人不得取此柰
果其國中有梵志居士財富無數一
國無双又聰明博達才智超羣王重
愛之用為大臣王請梵志飯食畢以

と大うお似たり又
引ゆらむは物語内付れ
かみの巻云云と
や唯とてさうゆへ
と上らうハ玉も
さうもんハ肉付の
そんりして同業家
おもほしうやと
つてつわもん
ゆらとあつて
此事哉いふは小
の部とつゆ又
あつてあつて
ゆらとあつて
く〇あつて
らつてあつて
もいふ
れらつてあつて

一柰實與之梵志見柰香美非凡乃
問王曰此柰樹下寧有小栽可得乞
不王曰大多小栽吾恐妨其大樹願
除去之卿若欲得今當相與即以
柰栽與梵志得歸種之朝夕灌溉日
日長大枝條茂好三年生實光彩大
小如王家柰梵志大喜自念我家資
財無數不減於王唯無此柰以為不
如今已得之為無減王乃取食之而
太苦澁了不可食梵志更大愁惱乃
退思惟當是土無肥潤故耳乃採取
百牛乳以飲一牛復取一牛乳煎為

此乃... 風土記ニ馬ヲ心ニイレテ
飼レユエ飼ノ國ト云レラ
カナカキニ甲斐ト書トイ
ルハ
今按本朝逸史引類聚三
代拾日天長四年十月甲
辰大政官符置甲斐國牧
官○此國所領收信濃
國同頃年蕃息漸多繫飼
歲倍云々是亦云より付
云レバ乃古事記云
開化帝皇子日子坐王之
子本本毗古王者日下部

醍醐以灌柰根日灌之到至明年
實乃甘美如王家柰而樹邊忽復生
一瘤節大如手拳日增長梵志心
念忽有此瘤節恐妨其實適欲斫去
復恐傷樹連日思惟遲廻未決而節
中忽生一枝心指上向洪直調好高
出樹頭去地七丈其杪乃分作諸枝
周圍傷出形如偃蓋華葉茂好勝於
本樹梵志怪之不知枝上當何所有
乃作棧閣登而視之見枝上偃蓋之
中乃有池水既清且香又有衆華彩
色鮮明披視華下有一女兒在池水

拾遺下四七

連甲斐國造之祖云景
行紀云自日高見國遷之
西南歷常陸至甲斐國
飼國と云々事ヲ一伝
山向此國なり峡ハ加比
故名と云々れといふ

中梵志抱取歸長養之名曰柰女至
年十五顏色端正天下無双宣聞遠
國有七國王同時俱來詣梵志所求
婢柰女以爲夫人梵志大恐怖不知
當以與誰乃於園中架一高樓以柰
女著上出謂諸王曰此女非我所生
自出於柰樹之上亦不知是天龍鬼
神女耶鬼魅之物今七王俱來求之
我設與一王六王當怒不敢愛惜也
女今在園中樓上諸王便共議有應
得者便自取去非我所制也於是七
王口共諍之終終未決至其夕夜萍

莎王從伏竇中入登樓就之共宿明
晨當去奈女白曰大王幸枉威尊接
近於我今復相捨而去若其有子則
是王種當何所付王曰若是男兒當
以還我若是女兒便以與汝王即脫
手金銀之印以付奈女以是為信便
出語羣臣曰我已得奈女與共一宿
亦無奇異故如凡人故不取耳萍莎
軍中皆稱萬歲曰王已得奈女六王
聞之各還去畧下めちよ奈女男子成
生やうそ又稱を成醫王著成婆成と
なり又廣博物志といくもろし

抄下四八

義興といふ所は其地といふ人ありわ
らうしてあつた此史となる其は荆
溪といふ川よりしある時川をさして
大なる螺をとりて取取りてたよ
おくよむらうらうらうと女となす其
地よりいひくおのの妻とて人々あつ
てて螺婦といひしあつたのめこと
をアツといふものしけるまゝ思ひ其
地をせめていそくそ又螺婦毛といふ物
あなりそららうらうらうらうらう
妻をいひしるは其地なるといふこと
は然る螺婦といふは

竹書

なりとてさうもた大なるおぼ模れ毛を
いふをあらうらうらうらうらうらうら
とてゆよまふかこれいさうはな
日鬼習をとりまれとて其世
りくまよとまよらまよとまよと
らせうらうらうらうらうらうら
くあこらうらうらうらうらうら
しき鬼の習しおくまよまよとたを
つまほてもちうらうらうらうら
づらうらうらうらうらうらうら
思ひてうらうらうらうらうら
とらうらうらうらうらうらうら

ふおそいお母のいさうをさう國よ
歎の名ぶらうらうらうらうら
さうまらうらうらうらうらうら
とらうらうらうらうらうらうら
けらうらうらうらうらうらうら
をいさうらうらうらうらうら
あこらうらうらうらうらうら
とらうらうらうらうらうらうら
をまらうらうらうらうらうら
ふおけよまらうらうらうらうら
とらうらうらうらうらうらうら
なうらうらうらうらうらうら

おれ七つちのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ

つとてさきさきのころはつこ
といふことばはつこ賢人乃
徳よおまむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ
うなむかひのちなる所が言ふ事よはつこ

しうぞ。熱田の神美由と化して。唐
 此をを乱し。経く。高鬼より。失
 ひをりし。なまむあひより。白をい
 づ。東より。去まう。そのを。熱田
 の神體。うわと云し。此説深とあし
 といども。尾張風土記曰。富樫山有
 神号白鳥。神日本武尊所化。白鳥也
 云。まろぬぞ。あつ。の神體。ハ。ふき
 なる。本。のき。して。堅執。と云
 ふう。又。楊。も。妃。ハ。白。鷺。の。精。なり。故
 日。其。爪。甲。赤。銅。の。ご。く。を。り。し。と。云
 白。鷺。も。ま。ろ。こ。と。う。な。行。を。ま。事。よ

(竹取下幸)

く。合。く。長。恨。秋。よ。と。さ。菜。ま。さ。い
 ま。ろ。く。易。妻。妃。よ。あ。つ。事。ハ。事。ハ
 こ。の。こ。こ。こ。と。黒。蘭。を。を。ろ。む。ふ。ふ
 ま。ろ。く

白鳥 藤原 像

竹取抄

竹取物語注跋

先兄伯鳳著竹取語注其病間之作也使弟翔
與翼隨口錄之蓋出于暗記者居多云始成未
及校閱而逝矣入江子昌喜恐其書不傳也更
為校之再四而亦補其說之未備即其所補則
別標出焉以與伯氏之所為不相混也噫伯氏
即世翼之弟也穀年而其書全成感愴
曷可已會書肆某清上梓乃與入江子謀再校
以與之伯氏而有其書中之一所引

據今將一書就其書而校正焉有力未能及者
深恐踈漏之不勉身雖然伯氏之才之學則
吾春水先生之序書之大方君子且勿歸
咎于伯氏幸甚

天明三年癸卯九月

弟 翔仲 鶉 謹識



弟 壽季 鶴 拜書

存取

天明四年甲辰夏四月

江戸日本橋三丁目

前川六左衛門

京都六角通御幸町西八

小川多左衛門

大阪南久太郎町心齋橋筋

柳原喜兵衛

書林

